

スピーキング能力を高める中学校段階のシラバス(3) －「流ちょうさ」を高めるための活動を成立させるための留意点－

千菊 基司

トピックを与え、生徒たちに1分間英語で話させる活動を通じて、スピーキング能力を高められる。指導法の工夫次第で、生徒は発話の正確さを意識するようにもなる。段階的に負荷をかけ、目標をクリアしていく感覚を持たせると、その効果は高まるようだ。生徒にとって、与えられたトピックに内容を思いつかない場合があるのが最大の困難だが、この実践では、様々な工夫により、一定期間、動機付けを高めながら、学習を継続できた。流ちょうさを高めるために、中心的な活動に据えることができる。

1. はじめに

当校の英語科では、中学3年の到達目標のめやすとして、実用英語検定試験・準2級合格の力をつけることと、校内ディベートコンテストに参加できる英語力をつけること、の2点を掲げている。両者を比較すると、前者は「実用技能」検定ではあるが、答えがある、という意味で、英語力の「正確さ」の伸長度を評価するための側面が強い。後者は、問題解決のための運用力が試されるので、「流ちょうさ」の側面が強いと考える。

英語によるディベート活動に必要な運用力は、(1)自分の考えを口頭で聞き手に正しく伝える、(2)聞いた内容の要点を理解する、(3)聞いた内容について質問する、(4)相手の発言の意図をふまえて自分の考えを述べる、などであろう。ディベートでは、聞いたことについて、すぐに質問や意見を表明するために、与えられた命題について、賛否両方の立場から、話し合いの展開を予想し、準備をしておくことも必要である。

上述の力を高めるために、今年度2学期より、『1分間トーク』を実施した。10月に始めて、合計20個のトピックについて1分間、ペアで会話活動に取り組みさせた。まずは2年次に取り組んだ「英文日記」のトピック、つまり身近な話題で活動を開始し、週あたり2回以上、授業の冒頭で行う「帯活動」として位置づけた。生徒が慣れてくれば教科書の内容に関連づけたトピックを選び、最終的にはディベートの要素を持つトピックを導入し、学期末に実施するディベート活動の準備とした。

この活動は、文法・内容・構成のすべての局面で語彙・構造面での自由度が高く、時間制限の下で、流ちょうさを伸ばすための練習である。ディベートの実施に向けて、まず積極的に発言する機会を設けるため、実施した。

2010年度公開授業(11月開催)の後の分科会でも、実際に意見が出されたのだが、「1分間トーク」のような活動は、あまりに自由度が高すぎて、どんな力がつくのかかわりにくい、という懸念が、指導者の側から出された。当実践においても、生徒が活動に慣れるまでは、

話すこと自体に慣れるまでにかかなりの期間がかかったという印象を受けた。しかし、実践開始から1ヶ月程度経過した後でとったアンケートでは、80%(回答117名中・94名)もの生徒が、この活動を楽しいとアンケートで評価した。学習活動というよりは、話し手と聞き手が役割を持った、コミュニケーションの機会だと感じていたようだ。

この小論では、「1分間トーク」活動を指導手順を紹介し、活動の実際を量・質の面から分析し、アンケート結果より、この活動によりもたらされた成果を述べ、最後に課題を考察し、スピーキング能力を高めるシラバスに組み込むための留意点を提案する。

2. 『1分間トーク』の指導手順

その名から想像できる通り、トピック(資料1)を提示し、1分間の準備時間を与えた後、1分間、とにかく話させるのが、活動の原型である。実践者により、様々なバリエーションがあると思われるが、当実践では、話し手・聞き手の双方が、意味のある時間を共有することになるよう、段階(約2週間毎・5回の授業)を経る毎に負荷を変えてゆき、以下のような活動のポイントをつくった。

第1段階では聞き手は単語数を数えるだけとした。語数を数える際には、『ワード・カウンター』(西2010)を利用させた。話し手の当面の目標を50語以上とし、ひたすら英語で話すことに慣れることに、集中させた。トピックは、昨年から導入していた「英文日記」で扱った、馴染みのあるものとし、情意面での抵抗を下げるようにした。なお、この段階では、教師自らがモデルを示し(準備されたスピーチとなるが)、話の構成などにおいて、参考にさせるのも良いであろう。

第2段階では、最後に聞き手が質問をするように指示し、聞き手の責任を高めた。もちろん、聞き手が質問できるよう、話し手がわかりやすく話をまとめる必要性も増した。

第3段階では、気持ちを表す形容詞をキーワードに話を展開させるようにトピックを考え、教科書の内容の発展活動とし、この活動以外の場面で学んでいる言語材料と結びつけやすくし、発話語数の増加を狙った。

第4段階では賛否を含むトピックを与え、ディベートの練習とした。ただし、賛否どちらの立場で発言するかは、当日に発表し、即興で内容を構成しなければならない部分は保持した。

すべての段階を通じ、活動が終わった後に1～2ペアの生徒を指名し、他の生徒の前で、活動中に話した内容を英語で要約し、レポートさせると、さらに活動が活性化するようだ。その際、発表の内容を教師が復唱する際には、間接的に文法的な誤りを訂正することができ、正確さを高める観点からのフィードバックが可能になる。

3. 『1分間トーク』の生徒参加の実態

『1分間トーク』の実態について、3年生の1クラスを選んで、量・質の面、(1)語数の変化、(2)情報構造、(3)文単位の誤り、から、パフォーマンスを分析した。

(1) 発話語数の変化の記録

前節では、この取り組みの指導手順を、第1～4段階に分けて記述した。量的側面から、生徒のパフォーマンスの変化を見る指標として、指導手順の違いは、発話語数に反映されたとは言いがたい結果と捉えている[41.71 → 39.56 → 37.14 → 43.62] (段階別平均語数・各回別は資料1参照)。しかし、場面をはっきり与えられている第1・第2段階においては、平均語数はともかく、30語未満の生徒が減少し、50語以上発話できた生徒の数は増えていく傾向が見られた。語数が少なくなるのは、共に学校の勉強に関連して語らせた場合であった。

原因の1つとして、与えられた話題について、話す内容を思いつかなかつたら発言できない、という制約がつきまとうことが考えられる。授業自体や、授業に関連した場面は教科書には少なく、必要な語彙のインプットが十分でないことも考えられる。

また別の原因として、次節でも触れるが、生徒は正確に発話しようと努力している態度が強いため、この程度の練習量では、現時点での能力の限界を超えるほどにはならないとも考えられる。第4段階のトピックは事前に与えられていたものであり、もう少し発話が増えるとも想像していたが、立場を決めるのが当日であったことは生徒にとっては負担だったようで、このような結果になった。

(2) 最後の実践の発話内に見られる情報構造の考察 20回の実践のあと、最後に、"High school students

should study at school on Saturdays." というテーマについて、自分の好きな立場で2分間話させた(準備も2分間)。CALLシステムを利用して録音、分析したところ、提出のあった39名中、36名については、発話の中に、立場の表明―理由の説明という構造が、理解可能で妥当な内容を伴った複数の「文」レベルの発言に支えられて成立していた。中には、3つ理由があると切り出している2つめで発話が終わっているものもあったが、これらは時間切れの結果であり、必要な構造は成立しているとみなした。

不十分とみなしたものが3つあったが、1名は立場と理由が逆になっており、否定を間違えたと考えられる。1名は、理由の表明はしているが、説明がまったくなかった。さらに1名は理由が2つあると切り出して、実際に2つの理由を述べているが、2つの理由は、内容的にほとんど差がないものであった。以上の3例は、よく聞けばわかるが、与えられた条件下の発話としては、聞き手が混乱すると思われるエラーを含んでいた。

(3) 言語表現上の誤り

36名の発話の構造が十分理解可能であったが、言語形式の面から、指摘しておくべき問題がいくつかあった。まず、「高校生」が話題であるので、主語は **they** とすべきであったが、17名が **we** を使用し、2名が **I** を使用した。客観的に話を展開すべきところで、個人の意見をそのまま述べている点が問題である。だが実際、高等学校への出願を終えたあとなので、誤りと言うのは、彼らの中で無理だと言われるかもしれない。

動詞関連での誤りを含む発話が11あった。助動詞のあとにすぐ名詞を続ける発話を含む例が4つ、主語と動詞の形が一致していない例が4つ、動詞と目的語のコロケーションが一致していない例が3つあった。しかし、コロケーションの誤りで、**join the club** というものが2つあったが、他の34例ではそもそも部活の話題を避けており、むしろ、果敢に挑戦した結果であり、活動の目的には適っていると思われる。

名詞の可算/不可算の用法に誤りがある発話が10あった。**little** とするところを **few** としていた例と、単数で表現すべきところを複数で、あるいはその逆という例が、ほとんどを占めていた。しかし同一発話内でそれぞれ分析してみると、すべての文で単複の概念が欠落しているという例は無く、「言い間違い」や「発展途上」のレベルだと解釈したほうが良いと思われる。

(1)～(3)から、この実践の中で、参加したほとんどの生徒は、話題に沿った十分な量の情報提供、相手の理解を助けるための情報構造、正確な発話の3点に気を配って発話していたと判断している。

4. 『1分間トーク』への生徒の意識

生徒の持つ、この活動への態度は、アンケート結果(資料2・3)より、次のように解釈している。

ほとんどの(94.8%)の生徒は、この活動を「学んだ知識を活用する場」ととらえ〔質問8〕、1分間の準備時間で限られた時間に情報を伝達する必要性から、「簡潔に話す内容をまとめる力」がつくと多くの(87%)の生徒が感じている〔質問11〕。また、実際に相手の話の内容は理解できているという実感から、「正確な英語を話す力」がついていると感じている生徒も多い(68%)〔質問9〕。これらの意見は、前節〔3.(2)(3)〕でのパフォーマンス分析からも支持される。

しかし、「論理的に話を構成する力」がつくと感じる割合は低く(58%)〔質問10〕、「オーディエンスを意識した発話力」となると、ほとんどの生徒は意識が至っていない〔質問12〕。簡潔に述べる活動になるという理想は理解しながらも、実際には、論理的と言えるほどには生徒が述べたいことが言えていない実態があり、このような回答になっていると思われる。

この活動に対する彼らの効用感は、「英作文の練習」という意識(88%)のほうが、「ネイティブスピーカーに話すための練習」という意識(57%)より高いが、これは中学校で身につける英語の知識や技能の限界を感じているからなのか、それとも、インターアクションする場面の時間より、モノログで話す時間の方が長いことに起因しているのかは不明であり、別の調査が必要であろう。

ただ、そのような限界の中でも、生徒は活動中において、「知識の活用」「発話の正確さ」「流ちょうさ」〔質問1～3〕をかなり意識して(61%・100%・88%)取り組んでおり、意欲の高さが伺える。

ただ、目標語数をクリアしようとするのが最優先で取り組まれていることもあるのか、「発話内容のわかりやすさ」〔質問4・5〕や「オーディエンスを意識した発話」〔質問6・7〕には、意識が向いていない。しかし現実問題として、与えられたトピックについて短時間で「準備」しないといけないため、相手のことを考えた題材選びはそもそも困難であると思われるし、発話数を必死になって数えているパートナーに対して、アイコンタクトをとる必要性はあまり感じていないのも当然かもしれない。

1分間で活動を切らないといけない〔質問19〕、話を1分間聞き続けられないといけない〔質問20〕等、この活動の性質が実際の会話行為と異なっている部分があるのだが、それが生徒の学習意欲を阻害している様子はほとんど見られない。ただし40人学級では、十分に生徒の

パフォーマンスをモニタリングすることが事実上不可能であるため、「発話に正確さがともなっていない」〔質問17〕ことへの不安は強い(74%)ようだ。また、与えられたトピックへの親密さの有無がパフォーマンスの質を左右する問題〔質問18〕については、当実践でも見られ、およそ3分の2の生徒が、与えられたトピックに関して話す内容を十分に思いつかない、というもどかしい思いをしたことがあるようだ。このことは、語数の伸びが、この活動への参加回数に比例していない大きな要因であると思われる。

文レベルで発話の質的分析を行っていないが、生徒は知っている知識と比べ、自分の活用している知識のレベルが低いことも不満に思っているようだ〔質問15・16〕。また、話の途中で日本語を交えてしまう〔質問22〕ことも、わずかながらあるようだ。

今後の実践においては、以上の解釈を踏まえ、以下の改善が必要であると考えられる。

5. 今後の課題

非常に多くの生徒がこの活動を肯定的に捉えていながらも、実際の発話語数(平均値)の増加につながらないのは、取り組みに不十分な点があったと考えている。以下のような改善が必要であると思われる。

- (1) トピックは、できるなら複数与え、内容を思いつかないから沈黙する、という事態に陥らないようにするのも1つの考えであろう。ただし、どちらのトピックにしようか迷うようでは困るのだが。
- (2) 完全に異なるトピックにせずとも、トピックの中の単語を1語変えるくらいでも十分な変化となるであろう。あるいは、同じトピックを複数回繰り返して、相手を変えて実践すれば、パターン化の弊害は防げる。
- (3) 活動に慣れるまでは、当実践の第1～2段階のような措置が有効に機能するが、生徒に慣れが生じた後は、時間を1分半～2分程度にまで伸ばし、聞き手の役割から語数カウントを外し、リアクションを発するようにすれば、アイコンタクトをとる必然性も生まれ、より現実的なスピーキングの活動となるであろう。
- (4) 正確さのチェックについては、この活動用に「記録帳」を持たせ、活動の後で、「言いたかったけれど言えなかった表現」を記録させ、英語で考えさせ、上述の(2)の取り組みのように、繰り返して同じ活動を行えば、フィードバックが活かされる機会となり、活動の意義が増すであろう(参考：山岡2010)。

正確さを高めるためには、各段階の最後の活動(5回の実践につき1回程度)において、例えばCALLシステムを用いて録音・再生することでペア・グルー

プでお互いに直せるところを指摘しあうなどの共同学習的活動を含めれば、生徒の持つ、この活動への期待と一致し、動機付けがさらに高まると思われる。

- (5) この活動の最大の目標は「流暢さ」を身につけることである。日本語の単語を3回までなら含めてもOKとする、などの特別ルールを作ることで、発話語数を増やしやすいうようにすれば、この活動への期待はかえって高まると思われる。

わずか5分程度の活動ではあるが、生徒は意義を見出し、活動に熱心に取り組めた。発話語数を増やす工夫を段階的に盛り込み、生徒が自らやる気を感じられるようにすれば、シラバスの中でより有効に機能し、より実り多き時間と生徒が感じるようになるであろう。

(資料1) 『1分間トーク』活動のトピック一覧

() の中の数は、あるクラス (n=39) での発話語数の平均・50語以上の生徒数・30語未満の生徒数
第1段階

- ① What I did last weekend (36.9・2・9)
- ② What I want to do on weekend (41.44・8・8)
- ③ One of my family members (38.83・6・7)
- ④ The country / city I want to visit (41.28・10・6)
- ⑤ The person I want to meet again (50.1・19・0)

第2段階

- ⑥ The thing I want to receive on my birthday (41.65・8・3)
- ⑦ My pet (39.95・7・6)
- ⑧ My favorite subject (34.34・4・13)
- ⑨ My breakfast time (36.1・2・7)
- ⑩ My schedule after school (45.78・12・2)

第3段階

- ⑪ I was excited / moved when ... (37.28・5・11)
- ⑫ It is fun to ... (38.73・7・7)
- ⑬ Space trip (38.49・7・9)
- ⑭ I was nervous when ... (39.2・7・6) ※公開授業当日
- ⑮ Exam preparation (32.02・2・16)

第4段階

- ⑯ I'd like to go to ~ with my girlfriend / boyfriend. (32.27・5・10)
- ⑰ I like summer / winter better than winter / summer. (41.8・8・6)
- ⑱ I'd like to study at home / in the library better. (54.08・23・1)
- ⑲ For children, it is better to live in the city / in the country. (48・17・1)
- ⑳ High school students should / shouldn't wear school uniforms. (37・2・7)

参考文献

- 中嶋洋一. 1997. 『生徒が熱狂・教室が騒然 英語ディベート授業30の技』 明治図書.
- 西巖弘. 2010. 「受験に役立つスピーキング活動」英語教育達人セミナー in 広島 口頭発表資料.
- 千菊基司. 2009. 「スピーキング能力を高める中学校段階のシラバス(1)－英検問題の分析と指導計画へのフィードバック」『広島大学附属福山中・高等学校中等教育研究紀要 第49巻 (pp.281-286)』
- 千菊基司. 2010. 「スピーキング能力を高める中学校段階のシラバス(2)－評価問題作成時の留意点」『広島大学附属福山中・高等学校中等教育研究紀要 第50巻 (pp.181-186)』
- Ur, P. and A. Wright. 1992. *Five-Minute Activities*. Cambridge University Press.
- 山岡大基. 2010. 「中学校前半における自由会話の指導」第41回中国地区英語教育学会自由研究発表資料.

(資料2) 1月に実施したアンケートの内容 4段階で回答 回収数 (筆者の直接担当クラスのみ n=77)

1 『1分間トーク』を行っているとき、どのようなことに気をつけていますか。

4 よく気をつけている 3 ときどき気をつけている 2 あまり気をつけていない 1 ほとんど気をつけていない

- | | |
|---|---------------------------------|
| 1 | (1) 最近習った文法・語彙をできるだけ使ってみる |
| 2 | (2) できるだけ正確な英語になるように注意する |
| 3 | (3) 語数を増やすために、できるだけたくさん話そうとする |
| 4 | (4) 自分の考えが相手に伝わりやすいように表現を工夫する |
| 5 | (5) 自分の考えが相手に伝わりやすいように構成・内容を考える |
| 6 | (6) 相手の興味を引くような内容にする |
| 7 | (7) アイコンタクトと声の適切さ |
| | (8) その他 () |

2 『1分間トーク』によって、どのような力がつくと思っていますか。

4 とてもそう思う 3 まあそう思う 2 あまりそう思わない 1 ほとんどそう思わない

- | | |
|----|---------------------------|
| 8 | (1) 学んだ知識(文法・語彙)を活用する力 |
| 9 | (2) 正確な英語を話す力 |
| 10 | (3) 論理的に話す力 |
| 11 | (4) 簡潔に話す内容をまとめる力(話し手として) |
| 12 | (5) 相手の立場にたって話を構成する力 |
| 13 | (6) ネイティブスピーカーに話す時の練習 |
| 14 | (7) 英作文の練習 |
| | (8) その他 () |

3 『1分間トーク』をやっていて、失望を感じる時は、どんなときですか。

4 よくある 3 まあある 2 あまりない 1 ほとんどない

- | | |
|----|--|
| 15 | (1) 語数を増やすことに気をとられ、単語の羅列にとどまっていると思えるとき |
| 16 | (2) 今習っている英語に比べて、あまりに簡単な英語しか使えていないとき |
| 17 | (3) 自分の話していることが正しい英語か確かめられないとき |
| 18 | (4) 自分があまり話す内容を考えつかない話題を与えられたとき |
| 19 | (5) 1分間話し続けるということが、「人工的」と感じてしまうとき |
| 20 | (6) 相手の話を聞いているとき |
| 21 | (7) 時間制限のため、話の途中でさえぎられるとき |
| 22 | (8) 相手に甘えてしまい、ついつい日本語を交えてしまうとき |
| | (9) その他 () |

4 『1分間トーク』は、英語の授業の他の活動と比べてどうですか。

また、それはなぜですか。自由に記述してください。

(資料3) (資料2)の回答の実際

4 の自由記述回答の例

- ・話す内容を考えながら英語を使うから、本当に力がついていると思える。
- ・自由度が高いため、実用的な力が身についていると思える。
- ・思いつかなかったら話が續かないので、せめて作文にしてほしい。そうすれば、正確さも確認できる。
- ・沈黙して困る時もあるのだが、1分間だから、良いと思う。でも、自分で考える活動は大切だと思う。
- ・この活動を授業の最後にしてあげれば、その日習った項目を使ってみようと思えると思う。
- ・今はわからないが、ネイティブスピーカーと話すときに、初めて効果が感じられると思う。

- ・他の場面で、自分の意見を話したり、友だちの意見を聞くことが少ないので、大切に思っている。
- ・一人一人、アイデアが違ったり、言い方が違ったりするのがいいと思う。
- ・全員が必ず参加する活動なのが良く思う。事前の1分間の準備はすごく集中して勉強になります。
- ・単語を多く使えと単純に楽しいし、カウントするのが楽しくなってきました。
- ・難しいけど、相手にわかってもらえるのがすぐわかってうれしいし、力がついたのかと思えます。
- ・自分の話した内容の、構成だとか表現だとか、改善点がわかるともっと有意義だと思う。

(資料3・続き)

(資料4) 生徒のパフォーマンスの例

※**1**~**3**とも、「その他」の回答なし。

質問 \ 評定	4	3	2	1	平均
1	1 0	3 7	2 6	4	2.69
2	3 4	3 3	9	1	3.30
3	4 9	1 9	9	0	3.52
4	1 3	3 8	2 5	1	2.82
5	1 2	3 1	2 8	6	2.64
6	6	8	4 7	1 6	2.05
7	9	2 0	3 5	1 3	2.33
8	4 3	3 0	4	0	3.51
9	1 7	3 6	2 2	2	2.88
10	1 7	2 8	2 8	4	2.74
11	2 7	4 0	8	2	3.19
12	9	2 6	4 0	2	2.55
13	2 3	2 1	2 5	8	2.77
14	3 4	3 4	9	0	3.32
15	1 3	2 4	3 0	1 0	2.52
16	1 5	3 7	1 7	8	2.77
17	2 2	3 5	1 8	2	3
18	2 6	2 4	1 9	8	2.88
19	1	6	2 7	4 3	1.54
20	1	1	1 6	5 9	1.27
21	5	1 7	2 8	2 7	2
22	3	1 1	2 9	3 4	1.78

(例1) 賛成 78 語 / 75 秒

High school students should study at school on Saturday.
I have 2 reasons for this.
First, most of the high school students have a entrance exam of university in three years.
So, they should study harder than junior high school students.
Many people say it is difficult to pass the examination of university.
So, if they don't study hard, they cannot pass it.
Second, if we spend the time at home, we can't study well, because on holidays, all the families relax at home.
so, we can't concentrate on studying.

(例2) 賛成 100 語 / 105 秒

High school students shouldn't study at school on Saturdays.
I have two reasons.
First, if students can't study at home, we can't have review time. Maybe many people say the class is more important to study, but I think review is more important to study.
If we have review time, we can study at class smoothly.
Second, if school has class on Saturday, it may be only in the morning. And we won't study in afternoon. If I study at home, we will study from morning to afternoon. So I think high school students shouldn't study at school on Saturdays.

※例1・例2ともに、自分で言い直している場合は、関連する一番最後の発話を記録。それ以外の発話の修正はない。